

私の信条

——「敬天愛人」ということに関連して——

長戸路 千秋

The question of questions for mankind—the problem which underlies all others, and is more deeply interesting than any other—is the ascertainment of the place which man occupies in nature and of his relations to the universe of things. Whence our race has come ; what are the limits of our power over nature, and of nature's power over us ; to what goal we are tending ; are the problems which present themselves anew and with undiminished interest to every man born into the world.

(T. H. Huxley. Relations of Man to the Lower Animals.)

『永久平和のために』の中に見られるカントの言葉を借りて比喩的にいうことを許してもらえば、「偉大なる芸術家自然」はその「偉大なる知恵」を用いて、先ずはこの地球を、そしてついには、その上にわれわれ人間を創り出した。これだけでもなお数10億年という、実に気も遠くなるような時間をかけて。この意味で、天地宇宙は、われわれ人間にとって、いわば、生みの親であり、われわれ人間は、その生みの子であるといわねばならない。とにかく、われわれ人間は天地宇宙によって生成されたものであることは、何としても否定し得ない事実である。"Man was born entirely from the world—not only his flesh and bones but his incredible power of thought." (Teilhard de Chardin. Human Energy. English translation, p.20)

であり、更にこれを裏がえしていえば、Man is unable to see himself

entirely unrelated to mankind, neither is he able to see mankind unrelated to life, nor life unrelated to the universe.” (Teilhard de Chardin. Phenomenon of Man. p.p.33-34) ということになるのである。

とすれば、われわれ人間は、その生みの親である天地宇宙を支配する理法（それは、logos, 法則, 道理等々いろいろな言葉で表現し得るであろう）に従ってのみ生き得る存在であるといわねばならない。そして、このことは、例えば、われわれが、ほんのちょっとした自然的、物理的な法則に反して生きようとしても、それは絶対に不可能であるという一事を以てしても直ちにわかることであり、また、わからねばならないことである。すなわち、われわれ人間は、自然法則に背反しても、更には、人間関係を支配する道理に背反しても絶対に生きのび得るものではない。そこに俟つものは、晩かれ早かれ死あるのみであることを意味しているのである。

これは恐しいことであるといわねばならない。それだけに、われわれは、そこに働らく深い理法を謙虚に追求して、より真実により真実にと、その生存のための道を見出していく不断の努力を重ねていかなければならない存在であるということの自覚を十分に持たなければならぬことになるのである。なぜなら、われわれ人間は天地宇宙の広大さからすれば、余りにも微々たるその部分に過ぎないものであり、従って有限で不完全なものであることを免かれぬ。そしてまたそれだけに、われわれは、思いをつくし、心をつくして母なる天地宇宙（大自然）が、われわれ人間が歩むべく前提してくれている道を、文字通り模索しながら生きていくよりほか、生きるすべを知らない存在、すなわち、幾多の試行錯誤を重ねながらも、その生存と繁栄のための唯一の道を求め続けていかなければならない存在であるからである。

幸いにして人間には、それがあらゆる動物中最も新らしく生み出されてきたものであるだけに、最も複雑微妙に造られ、その意識性もあらゆる動物中最も豊かであり、無限の探求心が与えられており、どこまでもその探

求の歩を進めていくことができる能力が具わっているといえるのである。

かくて人間は、その探求をより一層深め、かつ、効果的にするため、いわば分業的に、それぞれ担当の分野を限定し、視野を人為的に制限して自然科学や人文科学や社会科学など各種専門的学問を成立させ、尚その上に、それらそれぞれを更に細分して、より微細な専門化を進めるに到るのである。

このようにして人間は、天地宇宙を支配する道理を求めて無限の努力を重ねていく、否、そうしていかなければならない存在なのである。誠意を込めて歪めることなく、小事にこだわって大事を停滞させることなく、凝固して不遜に陥ることなく、逸脱して本筋を忘れることなく、専門にこだわって本末を顛倒することなく、さては、Francis Bacon が強調した各種の idola²⁾ に陥らないように十分に留意しつつ、ただひたすらに謙虚に、われわれがこの天地において、真の意味において生かされ得る一筋の道を求めて生涯稽古を重ねていかなければならないことになるのである。本学の建学の精神の「敬天」ということを、現代的に表現すれば、それはまさに、このようなことをも含意しているものといわねばならない³⁾。

ましてや、「パンタ・レイ」 panta rhei という天地宇宙の真相を念頭に置くとき、すなわち、動きに動いて止むことのない creative advance of the universe (Whitehead) の真髓を把握しようとするとき、このことは幾ら強調しても強調しすぎるといふことはあり得ないのである。

さて次に、われわれ人間を生み出した天地宇宙は、基本的にいってわれわれ人間をどのような形で生み出しているかについて考えてみなければならない。その時直ちに気づかれることは、われわれ人間は、決してただ一人の人として造られているのではなく、まさに種 species として、あるいは人類 mankind として造られているということである⁴⁾。考えてもみよう。われわれ個人なるものは、人と人とが構成する人間関係の中からのみ生み出され、そして各種各様の人間関係を展開しながら、重ねながら生き

ていくより⁵⁾他に生きるすべを知らない存在なのである。

天地宇宙は、われわれ人間を、決して単なる個人として造り出したのではない。われわれ人間を種として生み出し、種として公平に生かしているのである。かくて、西郷南洲翁にいわせれば、「天は人も我も愛し給うゆえ、我を愛する心を以て人を愛すなり」ということにならねばならないのである。また、人を代えて Benjamin Franklin に、キリスト教的な立場でいわせれば、

“There is one God who made all things.
He governs the world by his Providence.
He ought to be worshipped by Adoration, Prayer, and Thanksgiving.
But the most acceptable service of God is
doing Good to man.
The soul is immortal.
And God will certainly reward Virtue
and punish Vice here or hereafter.”

(The Autobiography of Benjamin Franklin. Yale Uni. Press, 1964. p.164)

ということにならざるを得ないのである。「愛人」の精神はまさにこのようなことを意味するものに他ならないのである。⁶⁾

以上二つを合わせて「敬天愛人」といい、このような精神を基盤とし、その上にしっかりと立脚しないでは、われわれ人間の未来の繁栄はおろか、その生存すらあり得ないのである。この天地宇宙の根本理法は、それが余りにも根本的なものであるだけに、精密な学問の分析をまたずとも、少しでも視野を広くして総合的に、均斉のとれた思考の努力をしさえすれば直ちに気づき得る、否、気づかねばならぬところのものである。そして、この道に従うより他にわれわれ人間にとって、その未来はあり得ないのである。

しかるに現実はどうであろうか。果して、こうした「敬天」の精神、ないし、「道理を重んずる精神」が健全であるといえるであろうか。否、そこには人びと相依り相俟って、これら二つの、人類が生き延び得るために、根本的に不可欠な理法に真向から背反し、それらを泥土に踏みにじる方向に遮二無二突進していると評する外はない様相を顕著に現出させているのである。対自然関係においては、人間にとっての「母なる大地」を荒しつくし、そこから得られる資源を濫費しつくそうとさえして自然の巡環過程を攪乱し、あげくの果てに、公害、さては資源不足の脅威の前に戦慄し、また、対人間関係においては、ありとしあらゆる個人的、集团的エゴイズムをほしいままに発揮して相互に火花を散らせ、さらに相互に憎悪を鼓吹し合って益々世相を険悪化させていく姿は、まさに人類滅亡への前奏曲であるとでも表現するほかはない有様である。それはこのままに放任すれば、晩かれ早かれ、カントが既に、今から200年近くも前に、人類に向けて発した皮肉な警告、すなわち、人びとが性懲りもなく戦い抜いて、その結果死に絶え、人類の巨大な墓場の上に始めて訪れる「永久平和」というフィナーレに到ること必定といわねばならない。これでは人類の未来はあり得ないのである。

いったい、どのようにしてこのような事態に立ち到ったのであろうか。今やわれわれにとって、この点について深く反省してみるものが喫緊の要務となるのである。

まず第一に、「敬天」の精神、すなわち、真の道理を謙虚に追求し、それに随順しようという精神が、今日立派に生きているとも、あるいは、少くとも大勢においてその方向に向っているとも決していえる状態でないことはさきに触れた通りである。この段階において既に恐るべき間違いが顕著であるといわねばならないのである。

これまたさきにも触れた通り、広大無辺の天地の理法を、一挙に把握するには、われわれ人間の力は余りにも微力であり、到底その任に耐え得る

ものではない。そこでその探求の努力に分業が行われざるを得ない。幾多の学問の分野に、細密な専門化が行われざるを得ない。かくして、そのそれぞれの分野で得られた成果は、それぞれ尊重せられるべきものではあるが、ただそれだけのものとしてはまだ「一面観」、ないし、「部分観」であって、到底「全面観」、ないし、「全体観」ではあり得ない。それこそ、「よしのずいから天のぞく」ような、いわゆる「管見」ではあり得ても、絶対の真理では決してあり得ないのである。⁸⁾ それぞれの成果の、バランスのとれた、公正な総合がなされるのでなければ絶対に真理に到る完全な道を見出したとはいいい得ないのである。分析があれば総合がなされなければならぬ。分析と総合とは相依り相俟って始めて人を真理に一步一步と近づけさせるところの、人間が会得した貴重な技法なのである。

ところが、今日の学問的風潮には、分析があって総合がなされていない。少くとも、軽視の傾向が著るしいのではないのか。あるいはいいかえれば、自覚的な分析はあっても、それに相補的にともなわなければならない自覚的な総合が怠られているのではないのか。⁹⁾

かくて、単なる一面的観察、ないし、部分的観察に過ぎないものをもって、全面的、全体的、ないし、絶対的な真理とする不遜さが、大手をふってまかり通る結果となっているのではないのか。単なる管見に過ぎないものをもって、真の道理となす傲慢さが、そしてその愚劣さが、種々様々の形をとって、あたかも百鬼夜行の姿で横行しているのではないのか。ここに学問的・思想的無政府状態は、ますますその深刻の度を強め、あたかも、突如として信号機の狂った交通繁華な交差点のような、放置すれば人びとはなすところを知らず、ただ阿鼻叫喚の耳を聳する喧噪の中に手をつかねている他はないような状態にあるのではないのか。

さらに、このことは、学問的研究者が、このような不遜におちいりがちであるのみならず、一般の人びともまた、それぞれの一面観、部分観のうち、何れか自分の趣向にかなうもの、ないし、自分にとって有利なものだ

けを摂取して頑固にその絶対性を主張して譲らず、それぞれ強引にそれを実行に移そうとさえする。

かくて、こうした一般の人びとまで加わって、さきに述べた学問的、思想的無政府状態に、更に拍車をかける結果となっているのではないのか。真理探求に専門的分業化ということ、そのことは人間の能力の関係上止むを得ない。だが、その成果の限りない自覚的総合への努力をなおざりにする限り、この無政府状態、従ってまた、いわゆる「馬鹿の一つおぼえ」や「屁理屈」の横行は避けられない。

「敬天」、すなわち、謙虚に道理を追求してゆくべきことを求める精神の欠如、ないし、不徹底が、結局このような結果をひき起したといわねばならないのである。

次に現今の世相を省みるとき、決してそこに「愛人」の精神が健かに生きているとはいえないこと、これもまた既に述べた通りである。この道への背反もまた目に余るものがあるのである。そこには単なる憎しみどころか、憎しみの鼓吹すら平然と、いや、狂熱的に行われているのである。まさに、「目には目を、歯には歯を」が道理を僭称して横行しているのである。その醜くさ、そのすさまじさ、われわれはただ慄然として立ちすくむ外はない陰悪な世相を醸し出してさえいるといわねばならない状況である。

いったい何が故にこの憎悪心の^{びまん}弥漫、そして、その鼓吹があるのであるか。その根源的な理由として先ず第一に、さきに述べた「敬天」の精神の欠如が考えられるであろう。次に、人類史的に見て、今日の地球上の人口の異状な増加が考えられるであろう。地球はまさに文字通り球形であり、その表面は球面をなして有限であり、従って人口の増加とともに無限に拡っていくことができず、結局、この有限の地表にひしめき合うという結果を来したことに基づくものといえるであろう。

要するに息苦しいのである。しかもその息苦しさに加速度がついてきてい

るのである。¹⁰⁾こうなると、もはや他人のことはかまっておれなくなるのである。己れ個人、ないし、身近なものたちだけしか考えておれなくなっているののである。

かくて、人びとは利己主義的な立場にのみたてにこもり、人類の未来のしあわせはおろか、その生存すら省みる余地のない状勢を作り出してしまふことになるのである。そして、このようにして、結局、エゴイズム——相互間の火花——人類殺戮兵器の登場——オーバーキル——人類の滅亡——墓場の平和という経路を辿ることを余儀なくされること必定といわねばならない。

現状はこのようである。今こそ渾身の力をこめて人類は、その知恵と愛とを結集して、その自滅を防止すべく、その本来あるべき姿にもどる努力をなさねばならない時なのである。これは、人類が未来に生きのびるために、みたさなければならぬ唯一絶対の条件なのである。

まことに、このような、「敬天愛人」の精神を抜きにして人類の未来はあり得ないのである。さらに附言すれば、このような次第で、この精神を抜きにして、次代の教育もまたあり得ないといわねばならない。南洲翁にいわせればまさに、「講学の道は、敬天愛人を目的とする」ということになるのである。

かくて、われわれは、「敬天愛人」というたった4文字のうちに、人類の現状に対する痛烈な警告と、その未来への深い示唆を読みとらねばならないのである。

注 1) Teilhard de Chardinによる complexity-consciousness の法則参照。彼自身の簡潔な表現によれば、それは次の如くである。

"A certain law of recurrence, underlying and dominating all experience, I think, forces itself on our attention. It is the law of complexity-consciousness, by which, within life, the stuff of the cosmos folds in upon itself continually more closely, following a process of organization whose measure is a corresponding increase of tension (or psychic tem-

perature). In a field of our observation, *reflective* man represents the highest term attained by an element in this process of organization." (Let me explain. 1970, p.145)

2) F.Bacon(1561-1626)が掲げた“idola”は次の四つである。(Novum Organum 第1篇)

1. 種族のイドラ idola trivus ……人間の属する, それぞれの人種あるいは種族に内在する欠陥から生じてくる謬見 (偏見)
2. 洞窟のイドラ idola specus ……それぞれの個人が閉じこめられている特殊な環境や教育や交際などから生じてくる謬見 (偏見)
3. 市場のイドラ idola fori ……コミュニケーションの手段としての言語の不完全さにもとづく謬見 (偏見)
4. 劇場のイドラ idola theatri ……各種の, 既成のドグマにわざわいされて生ずる謬見 (偏見)

以上, 非常に包括的に表現されているため, まずはこれで十分であろう。しかしながら, その具体的なあらわれとして, 今後いろいろな“idola”が, つぎつぎと新しく気づかれていくことであろう。例えば, Teilhard de Chardin は次の三重の“illusion”を指摘する。“The threefold illusion of smallness, plurality and immobility.” (Let me explain. p.25) すなわち, 人間の本性上, ともしればおち入りがち, その視野の狭さから, 不当に大きなまとまった現象を小さいものに, 大きなまとまった一つの現象を複数のものに, 長い目でみれば動きに動いてやまないものを不動のものに見てしまう過誤におち入りがち傾向を指摘している。私がしばしば「凝固することなく」というのは, この意味においてである。

3) 学問の方法に関連してこのようなことをいうと, 一見奇異に感じられるかもしれない。しかしながら, この問題についても, われわれは, 価値感を如何にしても完全に排除することはできないものである。とすれば, われわれはこのような結論に追い込まれざるを得ないことになるのである。

“Expel it with a pitch-fork, and it ever returns. The most ardent upholders of objectivity in scientific thought insist upon its importance.” (A.N. Whitehead. Modes of Thought. p.12)

4) 次の Marx の言葉もまた, このことを前提しているものといわねばならない。

“Man is in the most literal sense of the word a *zoon politikon*, not only a social animal, but an animal which can develop into an individual only in society.” (K. Marx. Contribution to the Criticism of Political

Economy, Appendix, I)

- 5) 例えば、夫婦、親子、兄弟姉妹、家族、親族、地縁共同体、経済的組織、文化共同体、国家、国際関係、人類共同体等々各種各様の人間関係をぬきにしてわれわれの生活は考えられない。
- 6) なお、Teilhard de Chardin の次の言葉参照。

"God looks to you to be more open and more pliant. If you are to enter into him you need to be freer and more eager. Have done, then, with your egoism and your fear of suffering. Love others as you love yourself, that is to say admit them into yourself, all of them, even those whom, if you were a pagan you would exclude."

(Let me explain. p.137)

- 7) この点について、Lewis Mumford は、「他のどの時代にもまして、われわれの生きる現在こそ、この問題提出の緊急性を理解することが要求される。なぜなら、こんにち、人間の人間らしさは、今までの歴史のどの時代に出あったよりも、いっそう根本的な野蛮状態に逆転する可能性によっておびやかされているからである。たとえ文化はそれ自身、累積的傾向をもっているにしても、それを継承する過程のなかでは、各世代は新規まきなおしに始めるのである。両親の愛情、子供の尊敬、未来へのたしかな感覚、これらがなければ、人間になろうとする努力そのものが、失敗に終るであろう。機械じかけ、自動じかけへの過度のもたれかかりによって、われわれの世代は、人間の人間らしさを養い育てる秘訣を喪失し始めている。というのは共同社会の各メンバーが、感受性を豊かにし、やさしさを深め、想像力を伸ばし、道徳的責任感を強くし、自己統治能力をそなえ、人間の理想像を模倣し、人類の理想的事例に自分を同化させるように素質づけられる諸条件に対して、あまりにわずかな関心しか払っていないからである。」(岩波新書 久野収訳・人間—過去、現在、未来— 14-15 頁) といっている。
- 8) こうした事情について、A.N.Whitehead は次のようにいい切る。
"Science is always wrong, so far as it neglects this limitation."
(Modes of Thought. Capricorn Books. p.14) と。さらにまた、ここから、
"The simple-minded use of the notions 'right' or 'wrong' is one of the chief obstacles to the progress of understanding." (ibid. p.15) と。
- 9) この点について近時、学問の分化は、もともと人間が勝手にやったことであって、学問は本来シームレスなものでなければならないということの主張が力強くなされてきている。まことに注目すべきことといわなければならない。(竹内均、上山春平著・第三世代の学問) 参照 (中公新書)

なお、A.N.Whitehead は、さきの「一面観」、ないし、「部分観」を一種の“abstraction”として把握し、“Now an abstraction is nothing else than the omission of part of the truth. The abstraction is well-founded when the conclusion drawn from it are not vitiated by the omitted truth.” (Modes of Thought. P.189) といい、さらに、“Philosophy is the criticism of abstractions which govern special modes of thought.” (ibid. p.67) とまで強調する。

- 10) Keneth Boulding がその著 “The Meaning of the Twentieth Century” において、経済学の立場から、人類が21世紀へ生きのびていくことができるために、陥ってはならないと考える重要なおとし穴の一つとして、人口の問題を強調するのも、また、わが国で、沢田哲夫氏が、私財をなげうってその著『人類永遠化の論理』を、増刷を重ねて各方面へ寄贈し続けられるのも、ここにその根本的な理由があるといわねばならない。